

か。仕事といっても、るす番をしていただくだけのことですけれど。」と言った。男は、どこで<sup>17</sup>働くのも同じだと思って「では、そのようにお願いいたしましょうか。」と、その<sup>18</sup>家で<sup>19</sup>働かせ～

— 略 —

男は、自分の<sup>20</sup>うちのことでも心配になってきて～

— 略 —

「そうですか。<sup>21</sup>うちのことが心配とあれば～」と言って、ころよくひまを<sup>22</sup>出して<sup>23</sup>くれた。そうして、お礼の印にと、お金の包みを<sup>24</sup>くれた。

男はとうげを下り<sup>25</sup>国へ帰っていった。<sup>26</sup>うちに着くと、つまにもお金の包みを見せ、～

— 略 —

おまえさん、これは、一年や二年働いて<sup>27</sup>手にはいるものではないんだぞ。～

— 略 —

男の<sup>28</sup>家のとなりに、よくばりのおやじさんが住んでいた。この話を聞いて、自分も一文銭を<sup>29</sup>手に入れたいものだと思った。そこで、三国とうげをさして出かけていった。そうして、前の男と同じようにして、美しい女の人の<sup>30</sup>家をさがし出し、そこで働かせてもらうことになった。

— 略 —

そこで、女の人のるすをいいことにして、いちばん<sup>31</sup>手前の倉から順々に戸をあけてみることにした。

— 略 —

夏らしいけしきで、青い海が広がり、岩の<sup>32</sup>上に白いかもめが飛んでいた。

— 略 —

まつの木に雪がふり積もり、雪の<sup>33</sup>上をうさぎがはねていた。

— 略 —

そのとたん、ここにあった四つの倉も、向こうにあったりっぱな<sup>24</sup>家も、いちじに、ぱっと消えてなくなってしまった。

— 略 —

どこをどう行けば自分の<sup>35</sup>家の方なのか、さっぱりわからなかった。(うぐいすの宿)

— 光村 4下 P.65~P.74 —

以上のとり出した単語について、次のような意味拡大の学習をさせることができる。

単語	学習させたいこと
1, 2, 25	25, 国が越後や村を意味しているということで、生まれ故郷を意味することがあること。

(3), (5, 9)(6), (11, 13, 14, 23), (24)	(季節の終り), (陽が沈んでしまふ), (慣用句で, あることに悩んで考えがそれで一杯になる。) (補助動詞, 自分・他人のために特にその動作をする意を表す。) (あたえる)の比較をさせること。
4, 10	(ある所からある所へ行く)(へやにいれる)の比較をさせること。
7, 12	(はじめる)。(ものを人にすすめる, 提供する)の比較をさせること。(7は補助的用法)
(8, 34), (18, 28, 30, 35), (20, 21)	(建物としての家), (住居というような, 建物に付随する人, 庭, 商売などを含めたやや抽象的な家), (家族, 家庭を中心としていう場合の家)の比較をさせること。
(15, 17, 19)(16)	(労働そのもので, ある仕事をする)こと, (仕事という意味合いが強く, 職につくというようなこと)の比較をさせること。
(27, 29)(31)	(自分の所有物とする場合のもの)(自分に近いほうという場合のもの)の比較をさせること。
32, 33	32は上空, 33は表面で, それが「飛んでいた」や「はねていた」で決定されていること。

### 6. おわりに

子どもの語いを豊かにするひとつの方策として、語いの意味の拡大をはかることを提案し、そのために教材を活用する方向を示してみた。ここでは、同一教材の中でどれだけ意味の拡大をはかれるかをのべたが、学年をこえて、一つの体系の中で意味の拡大をはかる指導がなされるなら、さらに子どもの語いは豊かになるであろう。

たとえば、「目をまるくする」という慣用句は、「ほかのじどう車が①目をまるくしました。(光村, 1上, 赤いスポーツカー)」、「～と、りすは②目をまるくしていました。(光村, 2上, うさぎとながぐつ)」、「ゆみ子は③目をまるくしました。(光村, 3下, いっぱいでひとり)」の場合、①は、「無鉄砲さに対してびっくり」、②は、「相手が何も知らないのにあきれている」、③は、「ないと思っていたことがあることを知って驚嘆している」という意味としてとらえることができる。そこで、この三通りの意味を学年をおって比較しながら学習させれば、意味の拡大は、じゅうぶんはかっている。

このように、ある学年で意味の拡大をはかる語いと、学年の進行につれて意味の拡大をはかる語いとを体系的に整理し、指導計画の中にとり入れていくことが、「語いが貧しい現代つ子」という声に対する国語科教育の解答であろうと考えるのである。